

911.3
廿
(白冊子)

三冊子
白冊子

三冊子存

三冊子乃三才より私身より三才を以て名を以て

連珠は三物の袂ひともうまのさた湯代のたき

おれは三都のいふもさうありていふる都乃きさ

少と家三つはまは風人おきとりあふのりこれ

此三才も伊賀のむすあう道地地を法と

着減後二十年はいさうり後半二十年はこれ

あの子名のとく後二十年は露のさきまね

ちうはき多くは去をゆるまはみかくふの

とく函底よりうんのとさうて道のるま



あはれきりしハ今年 栞まらりてむるまらし
ちりし文の才ならぬハ五車約瑞乃不ほきも
那く初階の板中ふとゆきしハ日曜の
きりぬりもちり筆とまらにいとまらぬハ
二伏の暮す兒初秋の涼く朱はあむむさ
而こをわくあむむさゆりまら

半化房

安あむ西申

園更

しりさう

辨階をふ之が天地開闢の時と皇有陰神陽神殿馭
降に天下アてまつめを喜哉遇可羨少女と乃る陽神ハ
喜哉遇可羨少女と云ぬはけり是ハあつてもなるん
よふゆり詞はむるふあふ故よ是と云れ始とまらと之神代ハ
又字にまらむ人の世とてはむのよはむふりそと十字にあら
ハ雲ふの如くハ重垣つてあま
やくり記つてそれハ重垣哉

はあふり定れらむと和風ふれハ和奇と云わあふ連
勢あり能詩あふ連乳ハ白川の法皇の古代あふ連

此号此先ハ後家と云る句の數も少くはる日本式冬來
夷人等の下ハ吾妻好氣波山て

新よりつらととて茂叔とぬる

と修しぬれば

わが方て後ハ九夜日ハ十日よ

中火焼し此堂の次傳は是連歌の起と云しつり業平の世の
不加之の仗の時ハ新ま來り人のつくはぬぬえふ一あれこ
と云上よ又邊坂乃開ハ瓶をんその蓋此四のついまりのを
て前此未減才付とあり

後を病の時程阿孫法師小林と云連歌差合を介のる

法式の古伝まり是本式あり聯句法立之是より新式あり
俳諧と云ハ黄門室家々の云利口之物と云ひきたるらんそらん
形きとのよらんを舟物とぬとのよ物とせ利口一と新之

歌学大成ハ鄭祭詩語多俳諧俳と感之諧ハ和也唐よたハ
現きて作はつ詩と俳諧と云又滑稽と云有滑稽は管仲
楚人答とや本朝ハ一休和者あるは亦ハ人ハお高る答乃
存乃上ありといふは利口古今集よこれと俳諧
とと定む是よ形そとて連歌のたこと云世ハ俳諧の
連歌とらん

夫俳諧といふもさうさうして代ハ利口のものにたひひれ先連歌

は謀を知りて中江新波の梅翁自中とありて世とは廣
くも中分りてしむる詞といふかこ此名之をうん
亡師芭蕉翁は道は出て三十余の他諧初を實成たり
師の他諧ハ名をいし此名をてびし此他諧ハ此ハ諷の他
諧ハ此ハ他諧の名をてまおハ誠をみく代しむる
抄秘のゆいあや師もは道に古人なりとあり又故人
の節をるハ来るにやまし今ありふ処の流もは後何そハ
出てををんハ誠をたま若と恐るるはく詞有るしハ
待奇よ名あり人多し皆その諷よりやと諷とたるあり
昨ハ誠を此りのハ誠を極く永く世の先達とある諷不

代とてししては時他諧に諷をぬるの天正は人の極
とありや師といふぬる人と連他並一之詞其ハ連乳有他諧
をんを連他ははれも詞を並他別てびしとありは仕
とありしハ有他言と云き声云詞初ら他言ハ連乳
とあり声のものありも他言の方之屏風几帳拍子律の
調子例ありぬ切紙取と言れ之ハ句連分よあり鬼女就
虎とのハ千句のりの詞他言ハ連乳ハ好ハ詞の極本危
杉雲の雲雲雨の五門出浦人綾女をの詞を言抄ありと
銘巴の詞書ホも教多之ハ作るハ此の歌を他言也

ちよりてしおきしとありそ女命花

我為あきかき人あかき舟

はか傍正遍照さう舟のたつるの時と先づ之他借のよ舟
なり詞と一かたは心さしつるをよる一詞と一かたの
さしつるをよるの句とさる先師のいふくつめし之他借の
難辨おぼしなれどもはめやうみ思ひ入す新

おのりてふ人の心乃くつるさる

まからしつるさるしも舟

ささきつはるの清のしつるさる

なう垣よりそむハ咲ルは

又さくまゐの柳ハ金新連珠之田口ハ五馬を全く

他借之又月雨又雪の浮葉とるよりくとつる句は詞とよ

ふなり一浮葉とるよゆ人と云而他之又若月や映さるく

双語てと云愛句とそれ物此あらしつるさるは根を心

詞とも他那ハな句とつて一首のつくはるしつるま

他借なり詞みまなり有共外この句此歌仿言一首

信而一節まよふしつるま

待て連俳ハよる風物之上三の月のハ餘も亦もそる餘す

不と他ハつるま云而那ハ花はつるまも解は糞とる餘

の先とまは月もあしつるまの比とえとめ又水はつるま

右此まよふ水の音とつるまつてまにあらる中よるま

はあ信正遍照さう時の暮るの時はあはれ
たり詞なりかたはれさしをよるし詞なり
されさるを下の句とせし先師のいふ
難辨あはれなるもはめやう思ひ入て

おもひてふ人の心乃く

立かたし

さうは

なうは

又さうまゝの柳は全新連珠之田

他借之又月雨は雪の浮葉と云ふ
みなり一浮葉と云ふゆんと云ふ
又お月や雪の
双語てと云ふ句はそれなり
詞にも他なり
他借なり
信正一節

待て連俳はもた風船之上
花は雪も解は葉も
の先と云ふ月も
左記は

姓のつゝ言に他譜と付付らるるに言はるるは他者或
るや白と或る赤は他譜の辨く他譜の式のつゝの連なる式
より習て先達の所法なるを連なるは式を追加するに
二條良基抄改作之今案ハ一葉祿園の依この三ツを一葉と
したるは省括乃作と連なると數ある相ハ四と一七と去
りのみ白と赤一乃他譜の辨くを去くは法一なるを
今案の追加は漢和の法を去くは他譜の法と比しとを
去るは真徳の元合の書その外その去世にありそのつ
とやハ他信用を去くといふりその中に他を言といふ
大抵よろしと云々元合のつゝも取くてハ調く

原の門よその一去りしつゝハ甚つゝを去く法と云と
ちのハ多岐あるにせしむるを去りて去といふ名あり
去法とせしむるハ名の詮なり代ハ何れも去りしと
人用ひしハ何れも去りし法とせしむる私と守れとハ
取くしき亦く元合のつゝの付置ありしと先ハ大うとに
して宜しとたつゝ法とあるハ亦ハ亦亦候して信用
てまあるの密より門の法とも取らるる人
其のふを先原よりひくしと去る二句法されハ用之むし此
句ハ其の詞と云々集メて其の詞とつゝ其の詞と云々
其れ後と云々いふと云々其れ別ら大切のつゝ取らるる

まうしんそのかゝ宗如宗祇の比と一句まで止る例あり
 阿の比は後而も門人にも讀して一句小ても並べざるも
 うく之又あり付云くお句並とも並べざるも併付か
 此の比は
 内を必意の句を付てお句より然にたるは
 句此をてつづく態も及へる新式よといは少法あるう
 去うれも並のよ八分てそ左の宗匠に任是
 ある能去又師の白連翁に核の句三句つさる也
 多くゆるは神祇又並並並の句核也
 今茲懸難示ありて又一ゆは阿の族神の句八た
 舎也まるともを教ありてお比と載一位の門

那の使事るらねと本ととまへと八連の教とあり又
 東海乃の一海も下ぬ人風軽牙芝朱那
 不效と用る新式も新古今自來の作者と用へる
 八代集ハ古今は撰抄後於迷合景詞花千載新古今
 後土師門依勅新勅撰後及撰二代を加へて十代集
 本新又又堀川志夜の作者との分八十代のかの集
 ともたし集也のぬ方とも他これ分併る之
 又新式といく人のあまひくあつる方と八付合
 むへるはひもはりの流ありハ川用由
 本奇と世奇と若別あり本方とつへる古方の記を

合二句をとりて改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
合する語を付るといふは改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
輪廻の多形式はまじとて句にこがしと付てまじ紅雲を付へか
らひ舟まで付へ一まじとて句にこがしと付てまじ紅雲を付へか
付て舟花と月半西影のこがしと付てまじ紅雲を付へか
あまのこまたとて句にこがしと付てまじ紅雲を付へか
数句とをとりて改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
と付て又竹出の時夜の字を付てまじ紅雲を付へか
云ふ山と竹出は軍士句と付たれ耶とて打越へゆふありを城
壁他准之一毫の他似たり句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接

うかろそくにまへうは原のいもく代のつらう先かきうは原を
白おろきとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
晴の他の句ある時を必りう句を引離し一転句を表と裏の句
あつた句の山もよるうとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
へしゆのれ連形はよりぬきにちりしをまきまきとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
や枝ぶさの花を送るうとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
しそ全てもうとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接
うとて句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接

秋風をぬく句何の句を改定すハ所遠き或ち一句余情又名詞接

邦中はこゝろを茶屋にせしむ

もみらちちりちり白川の舟

此方の夏所のいづくいぢー下りもをりくらなる様さう
 ちとくおれのおれさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 正後のまじり月比故と出て十月又及び白川を穿りお茶
 のちを穿りさうとて前の結用法所れがとひひひひひひ
 そのおのめを感懐あつてさうさうさうさうさうさうさう
 出ておれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 月ひあつ文字も用一連他のおま妻くあつさうさうさう
 ておれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

本おのうのり様は切らるる句にあつた又切字をくても
 ちを青を分別切字の才とてその位は月比とさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 まいこもものちさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 と素一らんり清よりりては句は切字なくして切字をくても
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 人ら道のまじりひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
 ひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ
 へーやいふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

文章のすけおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

序内序とよむ体あり由あるうとすまはせより先
のゆと序内ハその世の成れりてと云はば之体とひと
て序一もすも之様もぬと云はる序ありと跋あり序
も跋もその言下印一跋ハ序と終ありと云はるおぬ
と申りてあしと云はるれん之序跋とに子号目と云はる
七字去ハせむの格之七又之如と云はる此の成れり去あるひ
對ありぬを必對と云くちりて並對ハ古より對蹄山水
を生成亦ふのく對日あり初古の古格ありぬ
僕ハハ子跋もあはるゆと記ハるおと記さる之格ハ序
跋は同一と云はる遠のと格ハあはる同一と云はる遠のと贊ハハ

のり即山吹牙句を止る時ハ山吹をかえて賛ハ山吹
褒義の義理にある文章よ古時四文字く云はるこの格之
句合判のゆえ義判と云はる連中の打寄詮依批判者
と云はる性合ハ序義判の格之故ハ判者も志と云はる判
とりハ内とある奥は跋亦ても又序ありても序あり句ハ
まても付る之前に合合を以て居るのあはる此判もあり
方の判ハ左と云はる文章と云はる判者あり難陳あり
判者をもつと云はる判者あり判と云はる卷以ち多く
を技のもの

懐紙のゆハ百韻本式之五十韻仙と云はる此お連

の古式ハ表十句各終の裏六句月七句去花裏表よて十
宛表の内名所必一也今も清水連寄をいれしとあり
原のいこ古法表十句の例をきて八句以後二句は是
表よ終よの表連終に今にせは他よハくし一かは連
寄に就虎鬼女さし一物なる表の内終他諸少も鬼女ハ
形りしし一就虎ハくし一かは其の外人と殺を切るる
なとこれハ月拾遺一十百韻一示よ過一うんと原の云こ
又此の詞連懐の終祝言に云る句ハ表の内一う終ん
とたつては時原のいこ句によろし一文字ハくし一かは
祝言よいひる事とよも人の之に云わいよく連懐の終のい

し終の終よし一かは終一終よはる夕終よと全乃終
家と終よ句ハ月拾遺一一人の句ハとむし一と又表
終よ終よ終よ終よ終よ終よ終よ終よ終よ終よ終よ
又代物のよより月いなる形と此句の終い終んと云ハ師乃
いよく大形ハ表よ終よ一し中にもあるはさうらうらうらと
てもく終よ詞ハ物ハ終よしその下に終よのとおくるハ
他若書か終よ終よ終よ一向よらうらうらうら終よ
一し終よも表の終よあはるしハ終よらうらうらうら
さるかハあはるしと云里又古今の人の名表よもさうらうら
人さうらうらハ師の云今れ人乃名とつし一終よ一右人

之原のくく平急に非祇尺音を介一す阿の付ハ意して
根是ーた之詞もまんもらあハあ之ー但水祇をの
季一をりにして云句を根不感あてても阿之ーは云句
非依ー對付遠付しら依は爲の根むーより云意正之
原云才一云句を云もてつりあひ考へりしら依て付る
よー句中に依をぬむるあ之ー當りハ文字をハ里
宜是ーかふる自然よあるの根は使あり才一應對合伴
の心とありあー但志らぬーさハ先云句也とよくせ
志先させるも是れも但志あり念志とわらハんやうけ
挨拶しそよくせせを根是ー心とあはハんやうけして

云下致すことハ連音の云句ハ聯句此唱句之協を對之
此格として文字當之待聯句に對て韻とあ之才一ハ原の口
大付あても持して考ふる是之ーとなかり或はよ當りの
ゆむーハ依はるー宗祇より此格式之考用を通りたり
疑の切字れら句乃附を才一之ハ祇字にとめんと右末云り
ううハの句二句志取之讀ハううハのら字なり句中
押一字あをやかいつ何ぶとの終之又句はよりそ押字ふく
てとあるあり一字もこのそんちん人の終之式あり終句
の并之由てあせんとむーより云り是は定定の才一をせ
と之花のけりハ月此光分の終之盛りあてひうりあて

ようらう白ひの花一平雨一ツ物件とありて有美園せり
 きて花口平雨二ツあふまわりゆる連奇の式と原の河へ
 裏一吹のひも初のおしくかろくとあるへー句なをと集ふ
 うもふ及とと揚句ハ有さるよーと古説を今一白よ集ま
 一庭無さるあこまきと集て集ー並も言をが白と集ま
 亭まのまをあよわん初の一吹は執事れ句ねくハ揚句は
 集ま集へーが白うわる文字とつーむとあひの花とて
 集ま集ふ句に集るとも揚句に集るとねんへんたよ集
 六句に及ても集へーとつきの集集ても揚句はくた
 ありをせりらたわるへー



裏一次のひも初のおくかろくとある一白なを止ふ
うもふ及と揚句ハ有るよ一古説今一白もあま
一産興するあまのきて東一書もさかむま
書まのまのあまの初の一は執筆むねくハ揚句
書まは一か白りある文字をつ一むとあまの
書まふ白にむも揚句に書まをねん一ふんた書
六白に及てもま一むの書まめても揚句けら
ありをせりらたむ一



